

CASE 1

笛吹高校（山梨・県立）

コミュニティ・スクール導入で動き出した 地域と“点”ではなく“面”でつながる学校づくり



校長
廣瀬志保先生



教務主任
青野孝文先生

一緒に学校の課題解決を図る
「応援団」として組織化

笛吹高校は2023年度、地域探究に取り組む新教科「笛吹グローバル」の立ち上げとともに、コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度、以下CS）を導入した。前任校でCS運営経験があり、現在文部科学省からCSマイスターを委嘱されている校長の廣瀬志保先生はこう話す。

「本校は笛吹市内唯一の高校として、生徒が地域の美化活動や収穫祭への協力などを行ってきました。しかし、それはあくまで点でした。本校はスクール・ミッションに、『主体的に学ぶ力を育て、地域に根ざし、地域に貢献し、地域のリーダーとなる人材を育成すること』を掲げています。その実現には、学校と地域が「面」でつながり合うことが非常に重要です。CS導入を契機とし、本校の「応援団」を増やしていきたいと考えました」

CS発足にあたり、最も重要視したのは委員の人選だ。所属や役職だけを見るのではなく、「本校の課題と一緒に解決してくださる方」に依頼したという（図1）。

笛吹高校の 取組のポイント

コミュニティ・スクールを活用し
地域とのつながりを広げ、
持続させるには？

- コミュニティ・スクールを起点に生徒の地域との接点を増やし、双方向のものにする。
- コミュニティ・スクールを活用し、地域の視点を取り入れた学校の改善や、探究活動における地域との橋渡しなどを推進。
- 学校と地域がWin-Winとなることを意識する。
- 生徒の地域探究をはじめとする学校のトピックを、新聞やWebサイトで日々発信する。

「例えば、いじめ防止に力を入れるために心理学の専門家、学校評価の改善のためにデータサイエンスの専門家に入っていたきました。また、市役所には、生徒の多様な探究活動の支援先につながるよう、統括的な部署に協力を頂いています」（廣瀬先生）

学校運営協議会は年4回開催し、生徒との懇談や授業視察なども行う。年度末には学校側と地域側の双方から意見を持ち寄り、新年度の重点課題を設定する。例えば今年度は「地域コーディネーターの役割の明確化」「教員の働き方改革への対応」「少子化に

CSが起点となって 地域とのつながりが複層的に

この2年余り、CSがきっかけで実現したことは数多い。例えば、同校生徒が中学生の探究活動にアドバイスをを行う中高連携の取組、市と同校の包括連携協定に対するクラウドファンディ

に伴う生徒募集について」に取り組んでいるところだ。CS導入2年目以降は4つの部会を設置（今年度は「地域連携」「評価検証」「魅力化発信」「生徒育成」）、部会ごとに教員と連携し、生徒の声も直接聞きながら活動している。

「地域とのつながりが広がらない」「外部連携が単発のイベントで終わる」「行政との連携が希薄」…協働相手と関係を構築する際にありがちな困難を乗り越え、地域と共に歩む3つの事例を紹介します。



ある日の学校運営協議会。生徒も参加し、委員からの質問に答え、自身の意見を述べた。

図1

笛吹高校 学校運営協議会委員 (2025年度)

地域代表／PTA会長／同窓会長／笛吹高校 校長／
笛吹高校 教務主任／山梨大学大学院 教授／
山梨学院短期大学 教授／笛吹市教育長／
笛吹市総合政策部 部長／
笛吹農業協同組合指導部 部長／
山梨県建設業協会業務部 部長／防災プレーメン代表／
石和温泉旅館協同組合 副理事長／
笛吹市立石和中学校 校長／
笛吹市立石和南小学校 校長

地域の声



山本憲一さん
笛吹高校学校運営協議会 会長
(一般社団法人山梨県建設業協会
業務部 部長)

共に地域を良くしていきたい

先生方とは違う立場で専門性をもつ大人として、生徒たちに何かを伝えられたらと考えています。「笛吹グローバル」のワークショップでは、生徒たちと意見交換するなかでプロジェクトが立ち上がり、生徒たちの試行錯誤を1年間応援することに。最後に実現した手作りマルシェでは、それまでにない充実した表情の生徒たちを見て、感銘を受けたものです。地域には課題が山積み、その解決は簡単ではありませんが、生徒たちに「地域を良くしたい」という思いが芽生えることは非常に大切な一歩であり、心から嬉しく思います。今後、地域でその思いが循環していくように、自分にできることを全力で行っていきたいと思います。

ングの実施、生徒と地域住民のための学校前の道路の安全対策強化など、さまざま。

「CS委員の皆さんから教員にはない視点のご意見を頂き、はっとさせられたり、挑戦に向けて力強く背中を押していただいたりしています」(廣瀬先生)

また、「笛吹グローバル」の実践においては、CS委員全員がそれぞれの人脈を活かし、学校外の関係者との橋渡しを行う。加えて、CS導入の一環で配置した地域学校協働活動推進員や協働活動リーダーも、地域連携をきめ細かく支援している。CS委員は、時には自らが講師となり、地域課題の現状を伝える。そのなかで「一緒にやってみよう」とプロジェクトが立ち上がった例もある。「地域を元気にしたい」という思いは共通です。CS委員の皆さんが元々もつ地域愛が、生徒に接するなかで一層強

Win-Winを目指し 地域との継続的な関係性へ

まっているように感じます」(廣瀬先生)

地域との関わりのなかで、生徒たちは大きく成長している。中高連携の取組では、生徒は自らの探究経験を基に中学生に的確なアドバイスをを行った。また、3年生の探究発表は、2年前からは想像できない堂々としたもので教員を驚かせた。学校評価のアンケート結果では、地域連携の効果に関する項目が大きく上昇している。

「本校には内向的な生徒も多く、探究活動では最初から積極的に行動する生徒は少数派です。しかし、地域と関わるなかで、課題が自分ごととなり、自分にもできることがあるという自信

と参画力を高めています」(廣瀬先生)

CSの支えで日常的な地域での探究活動が実現。その様子を新聞やWebサイトを活用して発信すると、地域からさまざまな反響がある。CSを紹介して今後の活動へのリクエストをもらうことも多い。その積み重ねにより、地域との継続的な関係性が構築されてきた。

「地域と学校の双方にWin-Winでないと、関係性は長続きしません。地域側にも新しい発想を得るなどのプラス面があるから、次も一緒にやろうという循環になるでしょう」(廣瀬先生)

地域との関わりが増えたことは、教職員の意識変化にもつながった。

「今、生徒が学校外でいきいきと活動する姿を見て、『学校を社会に開くとはこういうことか』と。周辺地域がどん

な状況で、本校に何を期待しているか、意外と見えていませんでした。まず我々教員が、学校外にも目を向けることが大切だと実感しています」(教務主任・青野孝文先生)

同校は今後もCSを起点として、地域との関係性を広げていく方針だ。

「学校や教育活動に完成形はありません。社会変化に合わせて、学校も教員も試行錯誤しながら変わり続けていくてはいけません。そのなかでCSは非常に心強い存在です」(青野先生)

「学校魅力化の一層の推進など、本校が取り組む課題はまだたくさんあります。それらを校内だけで考えるのではなく、幅広い皆さんと意見交換しながら、共に取り組んでいけたら嬉しいです」(廣瀬先生)